

---

# 赤い糸

サザビー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い糸

### 【Nコード】

N5106D

### 【作者名】

サザビー

### 【あらすじ】

21世紀まで増加の一途を辿っていた世界の人口は、世界都市部爆破テロを期に、減少し続けていた。事態を重く見た国際社会連盟は、人口増加計画として西暦2101年に世界共通制度「縁授くをえんじゅを樹立、各国に国際人類学研究所を設立した。試験的に運用が始められ、10年の歳月が流れた。

## ブローグ：在りし日の約束

死は、生ある限り必ず訪れる。

舗道の片隅をささやかに彩る草花も。

夏の強い日差しを浴びて、元気に飛び回る昆虫も。

大自然溢れる草原を駆ける捕食者と、追われる獲物も。

人間も例外ではない。

事業で大成功し富や名誉を掲げ、人生を謳歌している人間も。

リストラを受け定職にありつけず、借金がかさみ、毎日の食料調達に汲々としている人間も。

死は唐突にやってくる。

死をそれと理解し、恐れもなく迎え入れる……そんな人間は稀である。その稀な人間の一人であろう人物、楠名ちなみ（くすなちなみ）の人生は今まさに、幕が降ろされようとしていた。

黒く艶やかな髪に、雪のように白い肌。曲線を描いた長いまつ毛は、大きな瞳を尚美しく誇張する。街などですれ違うと思わず振り返ってしまふ美女がいるが、ちなみはその中でも上位の部類に入るだろう。

彼女は今、病院のベッドにその身を横たえていた。

呼吸器を付け、腕からは点滴などの管が生えて見るからに痛々しい。ベッドの周りには心電図をはじめ、様々な医療機器が存在を主張するかのように規則正しい音色を奏でている。160cmの身体から洩れる吐息は熱を帯び、そのサイクルは早い。

気怠そうに開けた瞳の見つめる先に、一人の男が立っていた。雲に隠れていた月が顔を出し、その明かりが男の顔を照す。茶色の髪は乱れ、走って来たのか少し呼吸が荒い。

彼の瞳からは涙が溢れでて、目をウサギのそののように真っ赤にしていた。顔をグシャグシャにして子供のように嗚咽を堪えながら泣き続けている。

『安心・・・して』

ちなみは優しく微笑みを浮かべながら、彼 - かこがわりある 加古川理在 - に言葉かけた。

『またすぐに・・・逢えるよ』

そう言うとなみは目を閉じた。瞼の裏側に理在との思い出が上映される。

最初に映し出されたのは、ランドセルを背負った男の子。小学生の

理在だ。ちなみの隣で気難しそうに眉間にシワを寄せて、誰に言うでもなくブツブツ何かを呟いている。

- - この日は学校で先生に怒られて、ふてくされてたんだ - -

舗道に転がっていた親指大の石ころを蹴飛ばしながら歩いている。次の瞬間、何を思ったかいきなりその石ころを思い切り蹴飛ばした。スピードにのった石ころは、空気抵抗を受けつつも勢い良く飛んでいき、前を散歩中のプードルにクリーンヒット。飼い主には怒られるわ、理在は犬に足を噛まれるわ、背負って病院に連れていくわで大変だった。

- - あの時も大泣きしてたね - -

場面が変わり、今度は中学生の理在が現れた。授業を受けているフリをして、ノートに漫画のキャラクターを描いている。

- - 背がちっちゃくて、いつも小学4、5年生くらいに間違えられてたよね - -

次は葬式のシーン。理在達が中学2年生だった頃、小さい頃からよく一緒に遊んでいた海野凍夜<sup>うみのとうや</sup>という同級生の通夜だ。近所にある土手の広場でサッカーをしていた時、5才位の男の子が川に落ちたのを見た凍夜は、一瞬も躊躇する事なく極寒の川に飛び込んだ。正義感の強い凍夜のその行動により周りにいた大人達も事故に気付き、男の子は早急に救助され風邪を引いた位で助かった。

凍夜は5時間後、500m先の水面で物言わぬ姿で発見された。服に釣糸が絡まっていて大量に水を飲んでいていた。

通夜の最中、理在はずっと泣いていた。ちなみも悲しかったが、涙は不思議と出なかった。

ちなみは理在の頭を撫でながら慰めた。

『安心して。また、すぐに逢えるよ。』

そんな気がしていた。

ちなみと理在は父親同士が古くからの友人で、物心つく前からいつも一緒だった。幼稚園、小学校、中学校、そして高校。いつも、何処へ行くにも一緒にいた。一緒にいすぎて、時には双子のようにシンクロして、お腹が痛くなるタイミングまで一緒だった事もあった。泣き虫な理在は、いつもちなみの隣で泣いていた。ちなみは、そんな理在にいつも優しく微笑み慰めた。安心して、と。

理在は、ちなみのその言葉を聞くと、不思議と心に安らぎを覚え、笑みを溢した。

ちなみは理在に笑っていて欲しかった。理在の笑顔が好きだった。どんな綺麗な景色を観るよりも、それはちなみの目に美しく映った。

瞼のスクリーンに理在の喜怒哀楽が駆けぬける。

辛い現実に苛まれたあの時。感激のあまり喜びの涙を流したあの時。そんな毎日と一緒に過ごした、家族や仲間達、そして恋人。死の直前、その思い出は走馬灯のように脳を駆け巡るという。それは、死の間際にいる現状を、どうにか好転させようと過去の記憶の引き出しを開けまくり解決策を探そうとする、そんな本能的な現象だと何かの本に書いてあったのを思い出す。

- - もう限界・・・かな？ - -

ちなみはゆつくり瞼を開くと、側に立っている理在を見た。

理在にとってちなみは最愛の人であった。

ちなみにとつても理在は最愛の人であった。

お互いになくってはならない存在。しかし、死という圧倒的な切れ味を持つ剣が、今二人を切り離そうとしていた。

死ぬ事自体に恐怖はない。ただ、理在と離れる事が怖かった。

『またすぐに逢える』

ちなみは自分自身に言い聞かせていた。

理在は、拳を握りしめ、先ほどまでの泣き顔を、精一杯の笑顔に作り直して言った。

『またすぐに逢えるよ。必ず僕が逢いに行く。』

ちなみは微笑みを浮かべた。

心電図からは別れを告げる機械音が鳴り響いた。

## 第一章：夢

耳障りな雑音の合間に聞こえる爆発音、そして悲鳴。

接触不良テレビのように、映りの悪い映像が、徐々に鮮明さを取り戻していく。それとともに、雑音も消え始める。

- - なっ！？爆発！？ - -

少年は周りを見渡した。見知らぬ場所。造りの古いビルが立ち並ぶ大通りの舗道に、少年は立っていた。

銀行、デパート、生命保険会社などのビルから煙りが立ち上る。遠くのほうで、また爆発音が起こった。

ビルから吐き出された残骸により、道路交通も麻痺している。オフイスのデスクやパソコンなどもそこら中に散らばっていた。幾人もの人間と一緒に。

- - な・・・んだ？ここは！？ - -

あちらこちらから聞こえる悲鳴や、呻き声が思考回路に流れ込んでくる。視界に映し出された情報だけを頼りに分析したとしても、死傷者は10や20ではすまないだろう。

映画の撮影じゃないよな、と思った瞬間、視界に女性が倒れているのが見えた。生きてるのか死んでいるのかわからない人々がそこら中に倒れているのに、何故かその女性が気になった。自分はこの女性を知っている、という確信にも似た思いが、彼の体を動す。

男は彼女を抱き上げ呼び掛ける。彼女は男の叫びに応えるように口を開いた。



『．．ん．．。』

- - えっ？ - -

周りの爆発音などに邪魔されて聞き取れない。

『．．ん．．。』

- - 何？聞こえないよ - -

『．．．．．れん！！』

『．．．．．汐華蓮！！』

頭部への衝撃と同時に、自分の名を呼ぶ声が鳴り響いた。

『爆発か！！？』

汐華蓮は、状況を確認する為、咄嗟に後ろに振り向いた。  
しおはなれん

そこには顔見知りの同級生、菊谷善治郎が学校の席に腰掛けていた

『・・・あれ？』

善治郎は、心底冷めきった表情を浮かべ手に持ったライトペンで、前、前と合図している。

恐る恐る前に振り返ると、そこには『巨人』が立っていた。身の丈は2メートルを越えている。角刈りの男である。スーツに身を包んではいるが、そんなものでは隆起した筋肉を隠し通す事は不可能だ。巨人。華蔵学園かぐらの生徒はこの堅物そうな教師をいつしかそう呼ぶようになった。

『巨人』こと香取優かとりゆうは蓮を見下ろしながら静かに言った。

『汐華蓮。放課後、職員室に来い。』

『はい』

蓮は、この上なく素直な返事をした。

## 第二章：縁授

『またあの夢を見たのか？』

若干興味があるのか、善治郎は口に近付けたコーヒークップを途中で止めて蓮に問いかけた。

切れ長な目に眼鏡が栄え端整な顔立ちをし、髪は色素が薄く淡い栗毛、背も高く、成績優秀、スポーツ万能。頭のとっぺんから足の爪先まで秀才君の善治郎だが、初めて会った人は、必ずと言っていいほど冷たい印象を受ける。善治郎の身体にはそういうオーラが漂っていた。元々は、自身が完璧を目指す故の行動なのか、人の言動に対して過剰に反応してしまう性格である。そしていらぬ反感を買ったりする。自分でそれがわかっていている為、極力そうならないよう努めた結果が無関心を装うという行動だった。だが、今日の善治郎は関心事があるようだ。

『ほほう？』

『なんだ？』

『いや、善治郎君がそんなに俺の事に興味があるとは思ってね。』

『別にお前に興味がある訳ではない。お前の見たという夢に興味があるだけだ。』

あーそーですかあ、といいながら蓮は窓の外に目をやった。

先ほど突然振り出した雨は、少し激しさを弱めつつあった。放課後、職員室に呼び出された蓮は、担任である巨人の説教が終わるまで善治郎に待っていてもらっていた。短時間の説教＋体罰が終わり帰路についた二人を突然の雨が襲い、目の前の喫茶店に非難したのだ。

『で、何回目だ。』

『男に告白されたのは初めてだな。』

『何の話だ、マヌケが。夢の事だ。』

マヌケって言われたあ、とウソ泣きしながら言った蓮は、チラッと伺った善治郎の視線が、殺気をこちらに向けているのを確認すると真面目な表情になった。少し考えてから口を開いた。

『5回目だな』

『いつから？』

『1週間位前からか』

『ほぼ毎日か。あの模様が出てからだな』

『ああ、名紋ってヤツ？なんか胡散臭くねえか、あの縁授っての？オレあーゆーの苦手。女なんか好きそうだけど。』

蓮は怪訝そうに言った。

『胡散臭いか。』

俺は結構興味があるがな、と言いながら善治郎は鞆の中に入れてい

た国際社会連盟配布のパンフレットを手に取り、書いてある内容を蓮に読み聞かせるように朗読し始めた。

今世の記憶を管理します

前世の記憶が得られます  
いますぐ名紋取得を

・名紋とは眼球に描かれた赤い華の形をした痣で、前世に、ある特殊な方法を用いて眼球に自身の名前を記し残す事により、現世に生まれ落ちた後も、眼球に前世で記したものと同じ紋章が浮かび上がります。生まれた時から浮き上がってる人もいれば、何かの原因で、後から浮き上がる人もいます。

・名紋は、私達、国際社会連盟の国連憲章に基づき樹立された、赤い糸政策という世界共通の制度により、国際人類学研究所にて処置を受ける事で眼球に残せます。

・人口の減少が著しい現代において、それを阻止すべく取り入れられた制度です。縁授と呼ばれるシステムで縁のある方同士を出会わせ、婚姻率を上げ、それにより出生率を高め、減り続ける人口を増加させる為に実施されています。

・名紋が浮かばれた方は、国際人類学研究所に補完されている、自身の前世のあらゆる情報を得る事が出来ます（情報の補完期間は1000年）。また、前世、現世で自分が深く関わった人物とは（そ

の人物が生存、もしくは現世に転生している場合は）国際人類学研究所のシステムを介して、コンタクトを取る事が可能です。

・名紋が浮かび上がった方は、本人が国際人類学研究所に届けを出し、名紋認定を受けてください。これをやらないと今世の記憶を残せませんのでご注意ください。

また、検査により自身が名紋保持者かどうかを確認する事が可能で、陽性であれば、その時点で名紋が浮かび上がっていかなくとも名紋認定を受ける事が出来ます。

・名紋認定を受けた方は、各人に配付される指輪型情報転送装置を四六時中、所持して下さい。本人が見た情報や物に触れた感覚、考えた事等、あらゆる情報を名紋が蓄積し、綴りを介して国際人類学研究所のパーソナルDBに個人情報として転送、管理されます。この個人情報他者（研究所内の人間も含む）に漏洩する事はありませんのでご安心下さい。自体も、名紋認識機能を搭載している為、本人のみ使用が許されます。

名紋削除をした場合は、パーソナルDBの記録も削除されます。予めご了承ください。

2101年4月より実施。

2101年4月より赤い糸税の納金が義務付けられます。

蓮は、パンフレットを読み終えた善治郎の顔を見ず、バカにしたように引きつった笑みを浮かべた。

『すっげえ胡散臭え!』

外を見ると雨が止み雲間から陽の光が差し込み始めていた。

### 第三章：矛盾

先ほどまでの雨がウソのように晴れ渡った初夏の午後。

小紫の花が玄關脇の花壇に咲き薫る喫茶店『華織<sup>かおり</sup>』は、国道から少し外れた住宅地に申し訳なさに建っている隠れ家的な飲食店だ。

今はランチの時間も過ぎ店の中もかなり落ち着いているが、おばさん店主の専門家も唸らす料理と看板娘であるウェイトレスの美貌でランチタイムには近所の常連や、少し離れたオフィス街からのサラリーマンやOL達でこった返す。12:00~15:00の3時間の戦争が終わり、店内には五、六人の客がいるだけだ。『華織』は入ると左側にカウンターがあり逆側には四人席の丸テーブルが3つ、まっすぐ進んだ突き当たりを右に入ると長方形のフロアがあり、四人席の四角いテーブルが2つ並んでいる。奥のテーブルには二人の男子高校生が向かい合わせに座っていた。一人は眼鏡をかけた、いかにも優等生的な長身の少年で、少し近寄り堅い印象を受けるが、女性が放っておかなさそうな人物だ。もう一人はいかにも劣等生的な少年で少し長めの茶髪を揺らしながらカレーライスをも猛スピードで口に掻っ込み、目の前の優等生に向かって何か口走っていた。

『ほまへ・・・んぐつ、日頃クールを装ってるなら・・・ガツガツ、ほーゆーほひ・・・んぐつ、ゴクツゴクツ、ぷはーっ、踊らされるなよ。』

カレーライスを口一杯にした劣等生の蓮は優等生の善治郎に言った。

『別にクールを装った覚えはない。そんな事より、口のなかに物を



入れて喋るな。菌が移る。』

『何の菌だっつー!!?』

うるさいな、と言いながら善治郎は飲んでいたコーヒークップをテーブルに置いた。少し苛立っているようにも見える。

- - ん? - -

何か苛立たせるような事言っただけかな、と蓮は思った。2秒ほどの思考の末、答えが見つかった。

『はっはーん』

蓮はニヤニヤしながら言った。

『なんだ?』

『なんだよ、早く言ってくればいいのに』

『?』

へらへらしだした蓮。それを訝しげに見る善治郎。

『カレー、食べたいんだ - - 』

『いらん。』

- - なっ? - -

蓮はショックを隠しきれない。

『えーっ?! カレー食いたいんじゃないの?』

『いらんと言っている。しかも、お前が食べているそのカレーライ  
スも、そもそも俺の奢りだろう?』

善治郎はテーブルに置いてあるレシートをピラピラと振ってみせた。

『ん? ああ、そっか。』

ご馳走様です、と蓮は頭を軽く下げ、善治郎に聞き返した。

『じゃあ、なんでそんなに苛ついてんだ? 腹減ってるんじゃないの  
?』

『お前と一緒にするな。それと別に苛ついてなどいない。お前がカ  
レーライスを口のなかに含みながらベラベラ喋って汚いから注意し  
ただけだ。昔から一向に治らん。誰もお前のカレーライスを取っ  
たりしないのだからゆっくり食べて、それから話せ。』

『・・・もう食べおわりました。』

『・・・よろしい。で、なんだ？』

蓮はナフキンで口を丁寧に拭いた後、テーブルの上のチラシを指差しながら話し始めた。

『お前、なんでこんなものに興味持ってた？らしくないだろ？こんな歴史の教科書に載ってた出会い系とかゆるヤツの現代版じゃねーか。お前はどーゆー訳かモテルんだから別にこんなものに頼らなくてもいいだろ？』

ほれっ、と蓮は顎で隣のテーブルを差し示した。

その瞬間、隣のテーブルに座っている女子大生二人は気まずそうにうつむいたが、その後もチラチラと蓮達のテーブルの方、というより善治郎を見ていた。

善治郎は、そんな女子大生二人には一瞬たりとも目を向けず、蓮の質問に対し質問を被せた。

『お前はこのチラシを見て何も感じないのか？』

『は？・・・だから胡散臭・・・』

『お前、今いくつだ？』

また質問。クイズ番組か？善治郎の質問の意図がわからない蓮。

『何言ってる・・・』

『いいから答えろ。いくつだ？』

『・・・・・・・・17歳だよ。』

『今、西暦何年だ？』

『・・・・・・・・2111年』

『お前のない頭使ってよく考えろよ。』

そう言いながら、善治郎はチラシの下の方に書いてある文章を指差し、言葉を紡いだ。

『お前が生まれたのが西暦2094年・・・・・・・・縁授が運営開始したのが西暦2101年・・・・・・・・今は西暦2111年・・・・・・・・』

この瞬間、蓮は善治郎が何を言わんとしているかを何となく理解した。

『・・・・・・・・最後の質問だが・・・・・・・・』

善治郎は冷めたコーヒーを一口飲んで言葉を紡いだ。

『・・・・・・・・何でお前に名紋が浮き出るんだ？』

『知らん』

蓮は自身満々に言つてのけた。

## 第四章：疑問

善治郎は、自身の発した質問に対しての蓮の言葉に驚きを隠せなかった。

『知らん？おかしいとは思わないのか？』

『ん？なにが？』

- - はあ - -

コイツにはもつと噛み砕いて説明してやる必要があるな、と善治郎は使命感に駆られた。

『なにがって、このチラシには縁授というシステムは、前世で記憶をデータベースに保存し、眼球に名紋と呼ばれる自身の名前を残しておくことで、現世に転生した後も名紋が眼球に現れ、それをキーとして前世の記憶を得られるものだとある。という事は、名紋が現れた人間は、前世において名紋を眼球に残す処理をしているわけだ。だが蓮、お前の場合は生まれたのが17年前、西暦2094年なんだから前世はそれ以前ということになる。だが、名紋を残すのに必要な縁授は5年前に運用されたばかりだ - - -』

『ふあああ』

蓮は興味がないのか、大きな欠伸している。

- - このヤロウ - -

怒りを無理矢理押さえ込む善治郎。

『・・・真面目に聞け、蓮。』

『聞いてますよお、善治郎君。ふあ・・・で、そのなにがおかしいんだ？』

欠伸して涙で濡れた目頭を指で拭い、少し面倒臭そうに聞き返す。

善治郎は続けた。

『縁授を使い、現代の人々は名紋を得て記憶を保存出来るようになった。ただ、名紋を持っている者の多くは前世ではなく現世で名紋を得ているはずだ。前世で名紋を得て、亡くなった後現世に転生し、名紋が現れた者もいるとは思うが、まだ縁授は運用されて5年しか経ってないのだから、そんな人間がいたとしても現在その年齢は0〜5歳だろう。だが、現在17歳のお前は、現世で名紋を得た覚えもないのに名紋が現れた。計算が合わないだろ？』

『運用開始が5年前でも、縁授自体はもつと昔に出来てたかもしれないじゃん？』

蓮はちよつとした疑問をぶつけてみた。

- もつと前か。それも有り得る。が・・・-

『運用の12年も前からシステムが構築されていたというのか？システムが出来ているのに何故そんなに運用開始を待つ必要があるんだ？まあいい、とにかくだ。お前、明日辺り人類学研究所に行つて前世の記憶を得て来い。夢の事が何かわかるかもしれない。』

『はあ？なんでだよ！ーって。お前がなんで俺見た夢なんか気にしてんだよ？・・・』

もうこんな話やめようぜ、と蓮が言おうとした時、店の玄関が開く音が鳴った。

『ただいまあ』

聞き覚えのある声が店内に響く。

帰宅を報告する女性の声が聞こえた瞬間、蓮は忽然と善治郎の前から姿を消した。

- - - 逃げたか - - -

善治郎は軽く舌打ちをした。

『おかえり、姉さん!』

玄関の方から聞こえる蓮の声。

『あれ、蓮、いたの?じゃあ、善治郎君も来てるんだ?』

- - 仕方ない - -

続きは明日にするか、と思いながら善治郎は席を立ち玄関の方に顔を出した。

『こんばんは、琴美さん』

『あ、やっぱり善治郎君いたんだあ。こんばんは』

琴美と呼ばれた女性は屈託ない笑みを浮かべ、善治郎に挨拶を返した。琴美は、歳は20歳前後、長めの黒髪一つに束ね、薄化粧だが大きな瞳と長いまつげが印象的な、かなり綺麗な女性だ。

『今日はどうしたの?もう学校終わったの?』

『今日は土曜だから午前中で終わり。で、帰りの途中で雨降ってきたから、雨宿りだよ。』

『ふーん。・・・そんな事より蓮、また善治郎君に奢ってもらってないでしょうね!?』

優しく穏やかな琴美の瞳が鋭く光った。

――まずい――

蓮と善治郎は見つめあったと同時に、同じフレーズが頭を過った。琴美は蓮の生活態度における問題点を発見すると極端に怒りだす。蓮は、それを恐れていた。

『えっ？ああ、この間、善にカレーの旨さの何たるかを教えてやった時に、今度お礼に奢ってくれるって――』

蓮はダメ元の嘘を盾にし、防御を固めた。

『――ダメよ。アナタが払いなさい。』

蓮にとっては最強の盾が、琴美の鋭い矛により、いとも簡単に貫かれた。

『ううっ』

蓮は呻き声をあげた。

『あ、大丈夫ですよ、琴美さん。蓮に奢るって言ったのは俺ですから――』

善治郎は戦友のピンチに、戦いの真っ只中に飛び込んだ。

『――ダメよ。アナタは黙ってなさい。』

言い換えれば、『部外者であるお前は黙ってる』である。

『ううっ』

善治郎も呻き声。



――すまない、蓮――

琴美に見えない角度から、善治郎は拝むジェスチャーで蓮に謝った。

『・・・お金、ないです。』

そんなことはわかってるという表情で、琴美は諭すように蓮に語りかけた。

『いい、蓮。他人がいくらい顔してお金をあげるとか奢るとか言うてきても、絶対に信用しちゃダメ。まず何か裏があると思ったほうがいい。』

俺が悪いのか、と善治郎は思った。

『・・・はい』

――蓮、お前も肯定するなよ――

『お金は働いて稼ぐものよ。人からタダでもらうものじゃない。汗水流して、しっかり働いて、その代価として得るもの。あなたもお金の大事さをもっと知らないといけない。だから、蓮――』

琴美は厨房を指差して蓮に言い放った。

『働いてきなさい』

『・・・はい』

避けられない事態に諦めの念を抱いた蓮は、素直に厨房に向かった。

## 第五章：出逢い

蓮が厨房に入った後、善治郎は一人、座っていたテーブルに戻っていた。夕方になり客もちらほら見え始める時刻になっていたが、客が増えるどころか、自分以外の客がいなくなっている事にすら気が付かない程集中し思索を練っていた。

「……どうすればヤツを人類学研究所に連れていけるか、だ」

「……難しい顔してどうしたの？」

善治郎は、突然頭上より降ってきた質問に少し驚いて顔をあげた。視線の先には琴美がお代わりのコーヒーマシンを持って立っていた。

「お代わり、いるでしょ？」

「……戴きます。」

琴美は、飲み終わったコーヒーマシンのカップをトレイに乗せ、煎れたてのコーヒーマシンを善治郎の前に置きながら言った。

「あんまり悩むと、ハゲるわよ」

善治郎はガタツと音をたて、椅子ごと転びそうになった。

「アハハッ、冗談よ。」

善治郎は琴美を呆れ顔で見た。

- ホントに、この人は・・・ -

言いたい事は相手が誰であろうと言い切る強さ。優しい笑顔の中に、颯爽とした清々しさがあり、凜とした瞳はまるで白馬を見ているような気持ちになる。

-・・・アイツにそっくりだな -

善治郎は、蓮と出会った時の事を思い出していた。

善治郎が、初めて蓮にあつたのは中学1年の春。ブカブカの学生服に身を包み、目を好奇心という光で輝かせながら、彼は善治郎に話し掛けてきた。

『お前、どこの学校から来たの?』

『?!』

十数年前に起こったテロにより日本の人口も激減していた為、大人はもとより、その大人から産まれる子供も当然少なかった。統合される学校も後を絶たず、学区という言葉も死語となっていた時代である。小学校を卒業した後、進学する中学校は基本的には選べない。同じ小学校生活を共にした仲間に対する『どこの学校から来た?』という言葉も本来なら全く意味を持たないはずだが、蓮は善治郎と初対面だった。善治郎はある事情で小学校を卒業すると同時に蓮のいる街に引っ越してきたのだ。

善治郎は少し戸惑った。

彼は他人からこんな風に話し掛けられるのに慣れていなかった。と

いうより、人から話し掛けられないように拒絶態勢をとり鎖国ムードを漂わせていたため、その鉄壁のガードをくぐり抜け、言葉を投げ掛ける物好きがいなかった。

共に国会議員である両親に育てられた善治郎は、家を空ける事の多い両親の目を引く為、両親から褒めてもらう為に常に努力し抜いた。成績優秀、スポーツ万能。皆からは将来有望の声と羨望の眼差し。優越感に浸りつつ、常に己の行動に完璧さを求め始め、それが他者に対しても及んでいった。友人のちょっとした失敗が目に残る。

- - なぜこんな簡単な事が出来ない？ - -

- - なんでこんな時にそんな行動するんだ？ - -

- - もっと効率よく動けないのか？ - -

そんな思いが口をついて出るようになる。友人達は徐々に離れていった。善治郎は皆が離れていく理由がわからなかった。

- - なんで皆は僕から離れていくんだ？！僕は間違ったことなど何一つ言っていない。 - -

小学5年の頃には、善治郎に近づくクラスメイトはいなくなっていた。善治郎も半ば面倒くさくなり、自ら進んでクラスメイトと接点を持つとは思わなくなっていた。逆に、クラス替えの時などは、自分に近付くと言わんばかりに拒絶オーラを発し、人を寄せ付けなかった。

- - せっかく友達になっても皆離れていくんだ・・・そんな嫌な想いをするんだったら、最初から友達なんかいない。 - -

いつしかそう思うようになっていった。

担任から息子の学校生活の状況を聞いた両親は、自身が息子に与えた影響など欠片ほども考えず、全てを校内環境や地域環境のせいにした。

- 息子に今の環境は適していない。中学は別の地域の学校に行かせよう。 -

親の自分勝手な思い込みにより、善治郎は自宅よりかなり離れた場所にある、蓮と同じ中学校へ進学した。

環境は変われど人の性格はそう簡単には変わらない。小学校時代の出来事により人との接点を頑なに拒んできた善治郎は、中学校に入学してからも拒絶オーラを纏い、何人たりとも自己の領域への侵入を許さない、はずだった。その少々ねじ曲がった志しは、入学早々蓮という新たなクラスメイトによって破られた。

『なあ？どこの学校から来たんだ？引越して来たの？』

『・・・・・・・・・・』

前の席からの問いかけに無言で返した。

『なあってば？！名前は？』

『・・・・・・・・・・』

完全無視である。瞳にだけは、これ以上話し掛けるなと強いメッセ

ージを込めて蓮に送り返している。

それでも蓮は諦めるといふ言葉を知らないのか、同じような問いかけを繰り返している。

- - コイツ、バカなのか？拒絶してるのがわからないのか？ - -

善治郎は、中学生活第一声を蓮に対して発した。

『話し掛けるな』

『おっ？喋れるんじゃない！なあ、どこの小学校だったんだよ？』

善治郎は半ば呆れた口調で言葉を次いだ。

『話し掛けるな』  
『話してると言ってるんだ。わからないのか、このチビが。』

次の瞬間、窓の開いていない室内に微かな風が吹いた。

善治郎の目の前にいた蓮が消えていた。

## 第六章：豹変

次の瞬間、左頬に激痛が走ったと同時に善治郎の身体は廊下側の壁に打ち付けられた。咄嗟に受け身を取った為すぐに起き上がり、自分がいた場所に目を移す。

『?!』

そこには先程まで無邪気に話し掛けてきていた少年が怒りに体を震わせながら立っていた。

『この野郎。人の事を見下しやがってえ。』

- - な、なんだ、コイツ。豹変しやがった。 - -

状況を察しきれない善治郎をよそに、クラスメイトが蓮を押さえつけながら騒いでいた。

『おい、お前蓮を怒らせんなよ!』

『なにしてんだよ蓮！落ち着けっ！』

『離せっ！コイツの性根を叩き直してやるっ！』

『やめろっ！おいっ、お前も謝れよ！おい！？』

クラスメイト四人がかりの拘束を吹き飛ばし、蓮は善治郎に飛び掛かった。

『前の学校でどんな王様だったか知らないけどなあ！そんな偉そうな態度じゃ友達できねえぞ！』

『なってくれなんて、頼んでないだろ！』

カウンター食らわせてやる、そう思いながら善治郎は一直線に向かってくる蓮の顔面に拳を繰り出した。



鈍い音と共に右拳に衝撃が走る、はずだった。蓮は空中で体を捻りながら前転し、左足の踵を善治郎の右肩に斧のように振り下ろした。

『ドッ！』

肩に衝撃が走りうづくまる善治郎に、追い討ちの右フックを繰り出す蓮。が、その一撃は攻撃対象にヒットする事なく、第三者の掌で受けとめられた。

『邪魔すんじゃない？』

『れーん？アナタなにやってるの？』

『……あつ、姉さぶお！』

ドゴツ、とゲンコツが蓮の脳天に打ち抜かれた。

『姉さん、じゃない。なにやってるのって聞いているの。』

『えっ？いや、コイツが俺の事をチブバァ！』

バキッ、と正拳突きが蓮の顔面にヒットした。

『人のせいにするんじゃない。』

クラスメイトは皆何かに怯えるように押し黙っていた。

『トーヤが作ってくれたお弁当を忘れたから、せつかく届けにきてあげたのに。ケンカなんてして……。』

彼女は善治郎の傍にしゃがみこんだ。

『ごめんなさいね。この子私の弟なの。私は汐華琴美、この子は蓮よ。この子、自分の事、チビって言われると見境無く暴れちゃうのよ。普段は優しい子なんだけど。』

鼻血を垂らした蓮は、『チビ』の単語の部分にピクッと少し反応を示した。

善治郎は服に付いた埃を払いながら立ち上がった。

『ねえ、アナタの名前はなんていうの?』

琴美のその問いに、善治郎は鋭い視線で答えた。

『僕に話し掛けるな。』

ドゴツ、とゲンコツが善治郎の脳天に打ち抜かれた。

『初対面の先輩に向かって何偉そうに言ってるのよ！人が名前聞  
てるんだから答えなさいよ！』

『や、やめなよ姉さん！』

『うるさい！コイツの腐った性根を叩き直してやる！』

『×××××××！？』

『×××××××！！』

その後、蓮を含めたクラスメイト全員で琴美を押さえ込み、事なきを得た。

それから善治郎は、毎日汐華姉弟に付き纏われた。

興味という二文字の言葉に含まれた、新しい仲間の事を知りたい、  
という汐華姉弟の素直な欲望は、善治郎の心の分厚い氷を溶かした。

二週間程経った頃には、善治郎はクラスの仲間とも打ち解けられた。

未だに初対面の相手には無関心を装い、冷たい印象を与えてしまうが、当時に比べればまだマシなほうだ。

善治郎はコーヒーの薫りを楽しみながら、過去の出来事を思い出していた。

『何ニヤついてるの？』

琴美は訝しげに善治郎を覗きこんだ。

『ん？・・・いや、琴美さん達に初めて会った時の事を思い出していたんですよ。』

『あー、あの時の事ね。あれはひどかったよね？窓は割れるわ、教壇も真つ二つになるわ。』

『・・・全部琴美さんがやったんですよ』

『えっ？蓮でしょ？』

『琴美さんです』

『えー、うそー？』

疑りの眼で見る琴美に、善治郎は疑問に思っていた事を聞いてみた。

『・・・琴美さん』

『え、何？』

『・・・。。』

『何？どうしたの？』

『・・・あなたは一切何者なんですか？』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5106d/>

---

赤い糸

2010年10月8日14時33分発行